は十七世紀も中葉以後である。而も露中央部の當初保持せる對支政策は商業的目的に終始してゐたのである。然るに十九世紀に入り、西歐諸國に帝國主義的政策勃興するや、露も優秀な技術の援助の下に、極東に於ける脆弱地域、支那支配圈への侵入、領土侵略を開始したのであり、此所に幾多の國境問題を生じた。之に從つて國境も、先づ隣接支配圈の接近より生ずる中間地帶の發生に基く帶狀國境より、兩者の交通線上に於ける接觸點を連結しての中間地帶の漠然たる分割、更に政治的支配の伸張、全面的接觸に依る完全な線的國境の樹立、その變更へと發展するのである。

本書は露の東侵に基く斯かる國境の發展過程を滿蘇國境の西北部、北部、東部に分つて視察、檢討されたものであり、著者が「局地的な滿蘇國境の發生過程の研究に依つて境界發生の各段階に於ける典型を、系統的に理解することが出來、又逆に境界發生の系統的研究資料によつて滿蘇國境の現段階へまでの發展過程を理解出來るのである」と云はれる所以である。然し著者は之のみを以つて滿足しては居られない。「國境の根本的安定のためには世界的立場に立つて、近代列强の各支配圈の合理的配置を行ひ、國境變更を意圖せしめるが如き不合理を一掃せねばならない。」而して寒帶生活に適應性を持ち、熱帶資源を缺如する蘇聯圈と、熱帶へ擴大する東亞共榮圈とが相互に地理的立場を自覺し、有無相通ずるならば「東亞共榮圈と蘇聯圈との境界なる滿蘇國境は、そこに思想上及び社會機構上の根本的差異は殘るとしても」「平和な政治經濟的境界と化し、茲に安定を見る事が出來るであらう」と結論せられ、此所に大乘的立場に立たれた著者の烈しき意圖を見得るのである。

要するに本書は百三十餘頁の小著に過ぎないが、吾等の重大關心事たる滿蘇國境に就いての適當なる認識と將來への正しき示唆を與へるには充分である。たゞ、一般讀書階級を對象とする本書の性質上、本書中に現出する都市、町村、河川を記入した地圖の卷尾への挿入、並びに難讀なる漢字にて記せられた地名等への振假名の附與あらばと欲したのは私一人ではなからう。以上にて簡單に紹介を終る。（昭和十六年八月、中央公論社發行、東亞新書定價一圓）〔岡本信太郎〕

日本農耕文化の起源

森本六爾著

故森本六爾氏の名は、同じく若くして逝いた中谷治宇二郎氏と共に昭和の日本先史考古學界に同じ意味での重要な位置を占むるものである。彌生式文化を口にする者は必らず森本氏を思ひ浮べる。それ程、氏と彌生式文化研究との關係は密接である。然らば氏は有坂銘藏氏の如き彌生式土器の發見者・命名者であつたのであらうか。或は新遺跡の科學的發掘者なるが故に著名なのであらうか。否森本氏はフイルドワークに適した人ではなかつた。氏の健康が第一之を許さなかつたし、それよりも氏は更に書齋の學者、綜合の學徒たる天分を有してゐた。氏は彌生式土器の底部に印せられた一粒の籾から彌生式文化の性格を把握せんとした。亦土器の型體の鋭い觀察から、貯藏用のものと煮沸用のものを區別した。

而して、從來底部ではないかとさへ思はれたものが氏に取つては土器の蓋部に相當した。更に之には孔部のあるものが煮沸用の蓋であつた。又塗彩土器の高杯は氏に取つては明かに供獻形態の土器であり、尾張等に見る所謂形象土器は之が發展したものに他ならなかつた。

氏は斯の如く、單なる土器を以て古代人の生活に結び付けて理解せんとした。そして之をば他の共存遺物にも及ぼしやがてそれ等の全體を取りまくものが、氏獨自の彌生式文化の性格を形成したのである。例へば石庖丁に三型式のある事、それが型態が夫々伴出の土器に依つて北九州を中心とするものと、畿内を中心とするものに於いて夫々分布を異にしてゐる事、畿内の末期彌生式にはもはや石庖丁を伴はないのは之に代る鐵鎌が出現し農業が飛躍した爲なりと述べてゐる。かゝる基礎の上から氏の所謂書かれた歴史が生じるのである。次に流水紋を契機として、彌生式文化と密接な關係にある銅鐸、就中その繪畫も氏は彌生式文化人の生活の表現と見た。そしてそのうちから大臙にも共同狩獵形態、共同漁獵形態と更に共同農耕形態の三要素を摘出せんと試みてゐる。彌生式文化を何よりも先づ農耕文化として把握せんとした著者が、かくてその聚落立地の問題をも忘れなかつたのは當然である。本書に於いて低地遺跡の名が強調され、大和盆地の遺跡が注意例證されてゐる所以である。

本書は著者が生前なほ世間からの全服的支持を得ず、逆境にあり乍ら、一方に打ち寄せる病魔をも克服して、その自ら編せし雜誌「考古學」その他に執筆した諸論文中主要なるものをその七周忌に當る今、氏の同人後輩であり、且つはその學に傾倒した著者の靈房店主藤森榮一氏が、標題の如く一册の成書として之を著者の靈に捧げ、且つは一般人の彌生式文化の理解に便ならしめたものに他ならない。その編者の後記にも見ゆる如く本書には、著者の晩年に於ける記述が多く、それ等の互ひに聯關あるもの同志を組合せて四部に區別してゐる。いま便宜その目錄を載せて置く。即ち「日本に於ける農業起源」、「低地性遺跡と農業」、「彌生式文化と原始農業」、「農業起源と農耕社會」なる四編が入れられ、第二部には土器を中心とした各論が編まれてゐる。即ち「彌生式土器研究史」、「彌生式土器に於ける二者」、「煮沸形態と貯藏形態」、「赤色塗彩土器」、「動かさずに使ふ土器」の五編がそれである。第三部も同じく各論ながら此處では主として農耕生活の諸形態に關するものが入れられてゐる。「銅鐸面の繪畫に就いて」、「石庖丁の諸形態と分布」、「彌生式住居阯」、「彌生式文化の紡織」、「籾と農耕民の季節」がそれである。この中で最後の一編に土器中の籾痕の存在を以て籾の收穫と土器の製作とに必然關係あるべきを述べ、且つ之等が女性に關係ありとしてゐる論には、氏獨自の直觀力の鋭さの窺はれるのを附記しよう。第四部結論には「彌生式文化」と「日本古代生活」の二編が收められてゐるが、前者は雜誌「ドルメン」に後者は「歴史教育講座」に考古學と題し載せた氏の考古學から見た日本古代文化史の總括論であり、後者には氏の上來の物の理解の仕方を遺憾なくもつてゐる所に從來世に出た日本考古學書中著

しい特色をなしてゐるのを擧げたい。たゞ最後に一言したいのは氏が古代の藝術問題、社會問題等を取扱つてゐるものゝ中には、當識の域を大いに出でない論述が散見する事であつて、之等は將來改めて、我々がより深い考古學的立場から考察す可きであらう。

（菊版本文二九六頁、圖版十二葉、昭和十六年東京葦牙書房發行）

（藤岡謙二郎）

朝鮮の建築と藝術

關野　貞著

工學博士關野貞先生の沒後、門下の諸氏によつて編まれつゝある故博士の論文集の第三卷として、今回「朝鮮の建築と藝術」一卷の出版を見たことは、はるかに先生の遺德をしのぶ者ばかりでなく、廣く學界のためにも慶賀すべき事である。

關野博士が優れた建築史家であられたことは餘りにも世に聞こえて居り、建築史や藝術史の領域にいち早く考古學的資料を利用し援用して、自から一つの學風を建てられた事を記憶する者もまた少しとせぬであらう。しかし、更に博士が他の諸方面の學者にさきがけて、――まだ當時は韓國と言はれてゐた時代より――朝鮮半島の各時代の古蹟をあまねく踏破調査し、その顯彰保存に率先盡力せられた偉大なる業績を有せられることを知るものは、或は多くないかもしれない。

今日では誰知らぬ者とてない樂浪の古墳群、輯安の高句麗遺跡、或はまた平壤附近の高句麗壁畫古墳や慶州の新羅時代諸遺跡など、それらのすべてが先生の手によつてはじめて調査せられ、或ははじめて報告せられたものであることを、當時の先生の筆になる本書に收錄せられた諸篇は、しみ〴〵と思ひかへさせるのである。その意味において、先づ本書はかの『朝鮮古蹟圖譜』十卷と共に、朝鮮考古學界の開拓者として關野博士の名を永久に傳ふべき記念塔となるであらう。

第二に思はれることは、例へば本書の主要な部分を爲す「朝鮮美術史」をはじめとし、すべてに示された、行くとして可ならざるなき博士の鑑識の廣さである。都城を論じ墳陵を說き、建築彫刻繪畫はいふに及ばず、金石陶瓦あらゆる種類の工藝にも隨時筆を及ぼさるゝばかりでなく、時代の新舊によつて專門を限らず、資料の一つ一つが博士自身の眼によつて位置づけられ、前後の時代との關係のうちに眺められてゐるといふこと、それは將に驚くべくも豐富な教養の所產である。文は人なりといふ。恐らくは博士の學風であり人格であつたらうと思はれる、堅實な態度のうちに包まれた熱情が活字の間におごそかな光を放つのが感じられる。

本書に收められた長短二十四篇の研究は、二三を除いて大部分が明治の末年から大正年中に公にせられたものである。博士によつて始められた朝鮮の考古學的研究は、爾後、殊に近時の十年餘の間に長足の進步をとげた。嘗ては關野博士が不十分な資料によつて論じられた處を、今は豐富な知識を以て補ひ得ることも多いのである。併し如上の由來を顧みるに於て、その樣な見地から本書の內容に對して兎角の言を爲すことは不遜であらう。しかも、わ